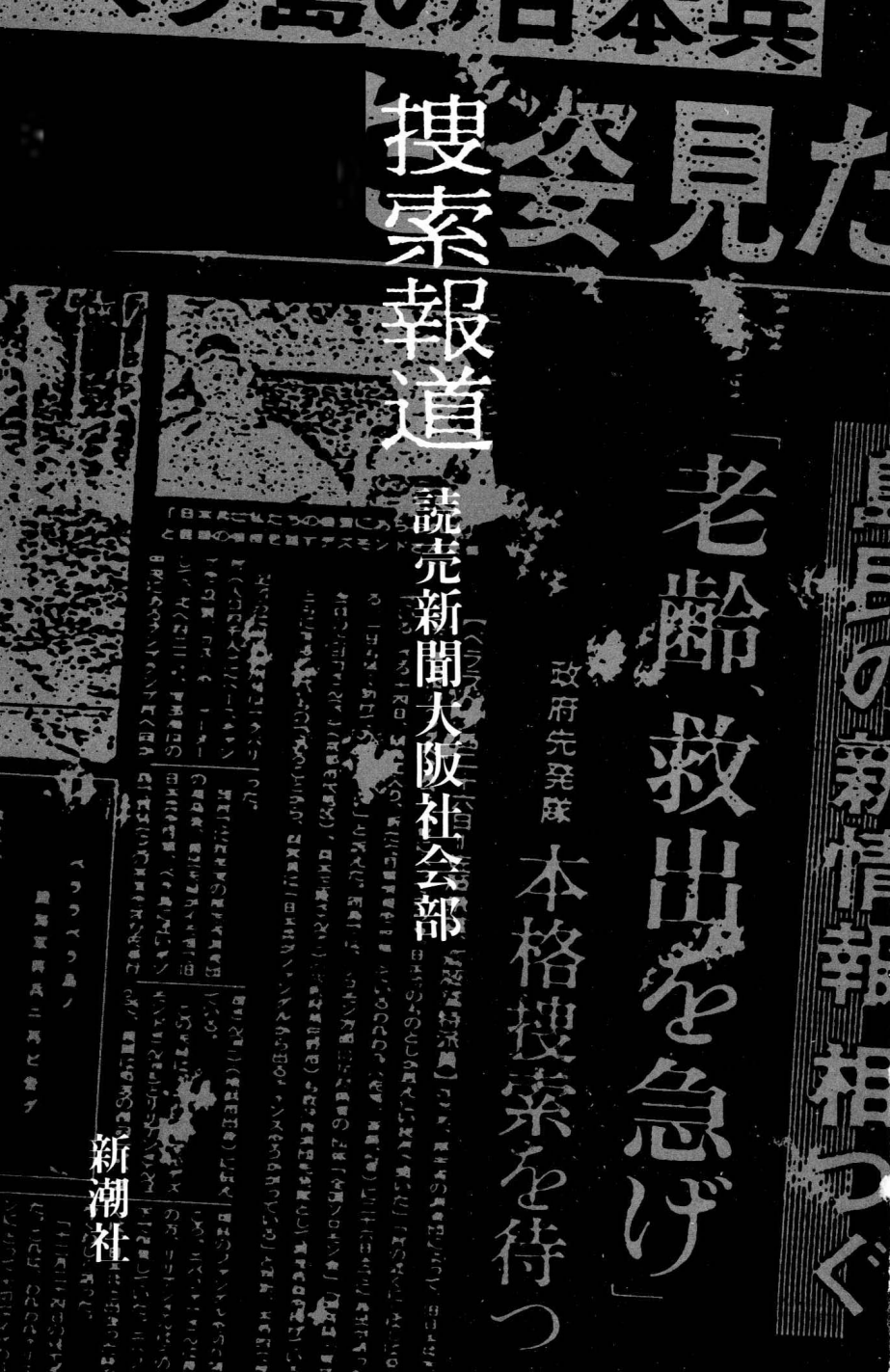
捜索報道

読売新聞大阪社会部

新潮社



捜索報道

読売新聞大阪社会部

新潮社

捜索報道（そうさくほうどう）

印　刷　昭和58年6月15日
発　行　昭和58年6月20日
著　者　読売新聞大阪社会部
定　価　1100円
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
電話　業務部 (03) 266-5111
　　編集部 (03) 266-5411
振替 東京 4-808
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
© Yomiuri Shimbun-sha, Printed in Japan 1983
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-339003-4　C0095

捜索報道・目次

1 南十字星 7
2 ナンバー・ワンの島 12
3 長老ゼデキア 19
4 樹海に舞うビラ 28
5 小さな足跡 32
6 イリンギュラ 41
7 少女バイトの証言 49
8 交信成功 56
9 社会部会 62
10 第二陣出発 67
11 捜索団到着 73
12 基地設営 85

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

13 リム調査隊 91
14 創世記の村 99
15 団長 108
16 ソロモン会員 118
17 いらだち 125
18 七つの石 134
19 石の反応 145
20 空転 154
21 逆転 164
22 再捜索決定 173
23 出発 179
24 中記者のメモ 186

25 生肉発見 195
26 特ダネ作戦 201
27 決断 208
28 去って行く船 218
29 山の神プノコ 226
30 対立 235
31 最後のジャングル 240
32 わかれの夜 248
33 敗北 253
あとがき 262

搜索報道

1　南十字星

寝返りも打てない狭い簡易ベッドの上で、斎藤喬は目をさました。深い闇の中で反射的に腕時計を見た。デジタル時計の数字は1:06を示している。昭和五十六年七月十四日の午前一時をまわったところだった。

無気味なほどの静寂の中で、ヤモリがチチチと鳴いた。頭の上でカサカサと音がした。ニッパハウスの屋根に葺かれたヤシの葉が風に鳴っているのだ。荒削りの木を敷いただけの床の隙間から生温かい風が吹き上げ、じっとりと汗ばんだ体にまとわりつく。

南太平洋上、南緯八度〇分、東経一五六度四〇分に浮かぶソロモン諸島国ベララベラ島東岸の集落マラバリ——。斎藤は、この島に、前夜着いたばかりだった。

ランプを持って外に出ると、満天の星だった。星は日本で見るよりずっと大きかった。高いヤシの木の黒いシルエットが潮風にゆったりと揺れ、その上に南十字星がくっきりと十字を描いていた。射手座、サソリ座、オリオン座がその十字を遠巻きにし、時折り、満天の星のキャンバスをカッターナイフで引き裂くように、大きな流れ星が弧を描いて地平線に消えてゆく。

目の前に珊瑚礁が広がり、その向こうから波の音が聞こえた。星の光はそこまでは届かず、海は黒々としていた。気温は三十度くらいだろうが、潮風が心地よく、蒸し暑さは感じなかった。海岸線からヤシ林がつづき、ヤシ林の背後には深いジャングルが迫っていた。闇の中で目をこらして見るジャングルは、闇の向こうの一段と暗い闇にかくれている。

「あの闇の底に、あの人たちは、いるのだろうか」

あの人たちとは、いまなおこの島に生存していると伝えられる旧日本兵のことであった。

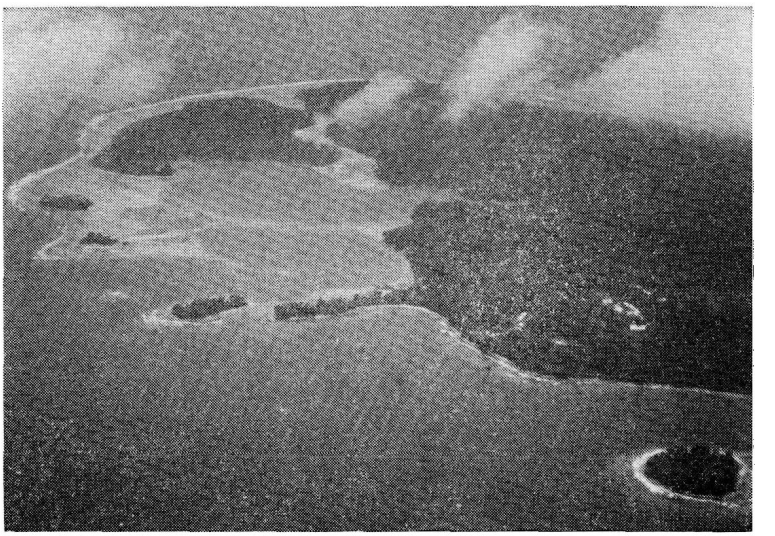
読売新聞大阪社会部の記者である斎藤は、日本から直線距離にして五千キロメートルの南の島ベララベラのジャングルに「複数の旧日本兵が残存しているらしい」との情報によって、同僚の佐藤崇雄と一緒に日本を発った。目的は、残存しているという情報をもとに捜索を開始することになった全国ソロモン会（太平洋戦争当時、ソロモン方面で戦

った旧軍関係者で組織されている民間団体。十一万五千人）会員と、それにつき上げられた形で重い腰を上げた厚生省の捜索状況を取材することであった。しかし二人は心の中で、捜索状況を取材するだけでなく、自分たちも捜索に参加して、なんとかして旧日本兵を見つけ、日本に連れ帰りたいと思っていた。二人をこの島に派遣した社会部長、黒田清の胸のうちも同じであり、そのために一か月後には取材記者第二陣の派遣が予定されていた。

昭和十五年生まれの斎藤には、三十数年前、日本から遙か離れたこの島に日本軍が上陸、戦闘をしたことさえ信じられなかった。まして昭和十八年十月に撤退したあと、何人かの日本兵がこの島に残され、いまなお生きているとは……。確かに、防衛庁の戦史叢書によれば、この島には昭和十七年から十八年にかけて、鶴屋大隊をはじめとする陸海軍混成部隊千二百六十人が上陸し、島の警備に当たっている。目の前に広がる黒々とした珊瑚海では、十八年の夏、戦闘員と戦略物資を満載した駆逐艦「萩風」「嵐」「江風」の三隻が撃沈され、海に投げ出された兵士たちの多くは鮫の餌食になったが、一部はこのマラバリ村の海岸などに漂着した。約三百人が山へ逃げ込み、指揮官もないまま、ジャングルをさまよい歩いていたという。そこへ、同年八月十五日、米軍が上陸、陸海軍混成部隊が応戦したが、島の北西部に追い詰められた。同十月六日夜半から未明にかけての撤退作戦で、五百八十九人が駆逐艦などに収容され、戦闘もそれで終結したことになり、戦後、日本人はこの島のことも、島の戦闘についても、すっかり忘れてしまっていた。

あの人たち――の存在に一部の日本人が気づいたのは、撤退作戦が行なわれて三十三年後、戦争が終わって三十一年後の昭和五十一年三月である。全国ソロモン会の浜崎積三事務局長（六十三歳）らは、それまでにも毎年のようにガダルカナル、ブーゲンビルなどソロモン海域の島々で戦死した人々の遺骨収集に当っていたが、五十一年三月、その旅の途中で、ベララベラ島で島民が旧日本兵を目撃したという情報を得た。浜崎事務局長は単身、ベララベラ島近くのギゾ島まで出向き、関係者の話を聞いたところ、それまでに三件の旧日本兵に関する情報があることがわかった。二件はいずれも、マラバリの近くで、戦後間もなく二人の日本人がつかまり、ガダルカナルやムンダへ送られたという話だった。三件目は昭和三十三年のことで、島の北東部海岸ココロベに住むイズペゼという夫人が集落近くの農園で仕事中、畑に接する林から旧日本兵が現れ、夫人はカヌーで逃げたが、振りかえると七、八人の旧日本兵が海の方を見ていたというのである。男たちは、髪が肩から背中に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



空から見たベララベラ島

垂れ、ひげぼうぼうだったという。この時はギゾの警察も警官を派遣してイズペゼ夫人から事情を聴取し、男たちが残した日本語入りの空き瓶を押収したうえ、ソロモン政府に報告書を提出したという。

浜崎氏が聞き込んだのはそれよりずっと新しいもので、昭和五十一年になって、イズペゼ夫人が目撃した場所からそう遠くない農園で、旧日本兵らしきものが畑を荒らして困るという情報である。浜崎氏は帰国後、ソロモン会員たちから、さらにベララベラの戦闘と撤退についての情報を集めると、生存を裏付けるいくつかの心証が得られた。すなわち、島を撤退する際に旧日本兵を残して来たという証言である。

ある会員は「私が救出船に乗り込んだ直後、ジャングルの中から伝令が飛び出し〝われわれの隊がすぐ近くまで来ている。待ってくれ〟と頼んだが、船は振り切って動き出した。待ってくれえーッと泣き叫ぶ声がいまも耳を離れない」と言い、またある会員は「五、六十人を収容して島を離れた直後、海岸を見ると六、七人が二つのグループにわかれて座り込んでいた。上半身裸で、何人かが舟に向かって手を合わせ、しきりに拝んでいた。頼む、迎えに来てくれと言うように……」と証言した。この二人の会員は一様に、戦後ずっと気になっていたが、何かのきっかけがなけ

れば、むごくて言い出せなかった、もうあの人たちは死んでしまっただろうと思っていた、とつけ加えた。

その年の六月、ソロモン会ははじめてベララベラ島に旧日本兵捜索団を派遣した。四十日間、島を捜索したが手がかりはなかった。その後も四年間に六度の捜索隊を出したが、細々とした民間の活動では成果のあげようもなく、わずかに二件の目撃情報を得たにすぎなかった。ところが、ソロモン会が七度目の捜索から帰った五十五年暮れから、また三件の目撃情報が相次いだ。

一件は、ココロペからさらに十キロメートル北西のカラカ地区に住むパラゲタという青年（二十二歳）の目撃説。集落の西南奥地の山中で道に迷い、自分で作った仮小屋に泊まった翌日の昼間、旧日本兵らしい一人の男が現れ、食べろというようなゼスチュアで無言のまま野豚らしい生肉を差し出してきたというのである。青年が恐ろしさでガタガタ震えながら首を横に振ると、男は残念そうに立ち去った。恐怖で服装はよく覚えていないが、うしろから見ると頭頂部ははげており、頭髪は黒く、腰の辺まで伸びていたという（島民は野豚の生肉は食べない）。

二件目は、島の南東岸、マラバリから六キロメートル離れたウザンバ地区在住のソロモン政府前国会議員、ククテイ氏（三十八歳）が集落から西へ四キロメートルほどの自分の農園で作業中に目撃したというもの。草笛のような音がしたので振り返ると、農園の端に上半身裸でボロボロの長ズボンをはいた小柄でやせた男が一人立っており、すぐ逃げたが、そばに仲間がいたのか、手で合図しているように見えたという。

三件目は、島東部海岸のランブランブ地区で、酋長の長男であるエバジャマ夫妻が自宅の対岸から歩いて三十分くらいの自分の農園で作業中、二十メートル先の農園の端に、上半身裸で、髪やひげがぼうぼうの男が立っているのを見たという情報である。夫妻が「日本兵ではないか」と後ずさりするとその男も逃げ去ったが、後で確かめると男の立っていた砂地にはだしの足跡があった、というものである。

この三件については、斎藤が島入りする三か月前、読売新聞大阪社会部が昭和五十年から長期連載している〈戦争〉の取材でソロモン方面に出かけた社会部の田村洋三、坂田考良両記者が現地で情報をキャッチし、四月三日付朝刊一面と社会面トップにホニアラ（ガダルカナル）発の記事で華々しくスクープしていた。

この記事がきっかけとなって、厚生省は政府捜索団の派遣を検討しはじめ、ソロモン会も二人の会員を先発させ、八月を中心にして本格的な捜索を行なうことになった。一方、読売新聞大阪本社では、黒田社会部長がある決断を下

していた。つい半年前、少なくとも三回にわたって旧日本兵らしい男が島民によって目撃されている。髪やひげの長さは少し違うが、上半身裸でやせこけた男という点ではどの情報も共通している。島民の話がどれだけ信用できるものかは現地へ行ってみなければわからないが、戦史叢書などの記録やソロモン会員の戦闘状況の証言から見て、戦後のある時期まで、複数の日本兵が終戦を知らずに生きていたことはほぼ確実である。問題は昭和十八年から数えて四十年近く経ったいままで彼らが生きのびているかどうかだが、グアムの横井庄一、ルバングの小野田寛郎両氏の例から考えても、日本人が南の島のジャングルの中で長期間生存することは決して不可能ではない。可能性があるとすれば、それに賭けるべきではないか。

黒田は編集局のまん中にある局長席に行き、明治生まれの編集局長、坂田源吾にその決意を伝え、最後に小さい声で「取材費は一千万円ほどかかると思いますけど……」とつけ加えた。坂田は費用の点は聞こえなかったようなふりをして「そりゃ、やらにゃいかん。なんとかして探し出せんかなあ」と答えた。黒田は席に戻るとすぐ遊軍記者の斎藤と佐藤を呼び、ベララベラ行きの準備を命じた。

「横井さんも小野田さんも大ニュースになった。しかしベララベラはもっと大きいと思う。というのは、今度出て来た場合、一人やない。日本兵が終戦から四十年近くもの間、集団で生きてる可能性があるんや。集団で出てきたところを想像してみい。大変なこっちゃでえ。何十年も自分の国、自分の家族と生き別れになっていた人たち。われわれがいつも伝えようとしている戦争のむごさを訴えるには最高の材料や。これは絶対、われわれがスクープせんとあかん。だから、これまでの取材経験、判断力、体力、あらゆる点で第一陣は君らしかないと思うて選んだ。期待に応えてもらいたい」

斎藤は、興奮したときに決まってポンポン飛び出す黒田の大阪弁まる出しの、その時の昂ぶった口調を思い出していた。そして自分の心のうちも昂ぶってきているのを感じながら、もう一度夜空を見上げた。星がまた一つ、弧を描いて黒い海に消えた。

2　ナンバー・ワンの島

白い光がニッパヤシの屋根のあちこちから矢のように射し込んでいた。子どもの歓声と、それを追っ払うようなおとなの声がまじって戸外から聞こえてくる。

もう午前八時をまわっていた。斎藤は深夜に目を覚まして、大きな星のキャンバスと黒い海を見たあと、さすがに長旅の疲れでぐっすり眠ったようだ。窮屈なベッドの上に上半身を起こして見ると、隣に並べられた二つの簡易ベッドの主はもう起きたあとらしく、きちんと折りたたんだ毛布と枕が置かれているだけだった。

表へ出ると、光がさんさんと緑の木々にそそぎ、空は抜けるように青かった。ヤシの木の向こうの珊瑚海は青緑色で、海面で光が玉になってはじけ、あちこちでカツオドリが群れている。はるか海の向こうに、戦争中、「ソロモン富士」と呼ばれたコロンバンガラ島の山並がうっすらと浮かんでいる。家の前にはチョコレート色の肌をした子どもが十数人じっとこちらをうかがい、斎藤が「モーニング」と片手を上げると、人なつっこい黒い顔の中で、白い歯がキラッと光った。子どもをかきわけるようにして、長身の青年が近づいてきた。マラバリ村の青年団長で、家主でもあるキャメロンだ。斎藤たちはきのう、島に上陸するとすぐマラバリ村の長老、ゼデキアを訪れ、旧日本兵の捜索に来たことを告げ、協力を依頼した。長老はとりあえず斎藤たちが住む家として、独身のキャメロンの家を提供してくれたのだ。

キャメロンは黄色いTシャツを着ていた。シャツにはこの国の象徴である首狩り族の勇者の横顔がプリントされ、「インデペンデンス・ソロモン」と英語で書いてある。三年前、英国の保護領から独立して、ソロモン諸島国となった時の記念のシャツである。二十九歳のキャメロンは、独立したばかりの若々しい国の青年団長らしく、キビキビしていた。

「サイトウ、今日は何を手伝おうか。われわれは準備OKだ」

「待ってくれ、まず、顔を洗わなくちゃならない」

「そりゃあ、そうだ。今朝は川の水がきれいだから気持が

いいぞ」

斎藤はタオルと歯ブラシを持って、前日教えてもらった洗面所へ歩きはじめた。海岸沿いに細長く人口四百人の集落を形成しているマラバリ村の中央に、幅約五メートルの谷川が流れている。この上流に洗面所兼浴場がある。ヤシ林の下草の中の細い道を十分ほど歩いたところだ。

きのう、キャメロンはこの道を案内しながら「道は二本ある。力強く踏みしめた道は男の浴場に通じるし、踏みしめ方が弱い方の道をたどると女の浴場に行く。これは島のどの村へ行っても同じだから間違えないように」と教えてくれた。海辺のトイレに行く時も同じで、うっかり弱い方を歩くとひどい目にあうと言い、どんなひどい目だという質問には笑って答えてくれなかった。

高さ二十メートルはあろうかと思われる大木に囲まれた洗面所は、上流からたえずそそぎ込む谷川の水をたたえて澄んでいた。川の中には大小の魚が黒々と群れており、足をつけると寄ってきた。斎藤はリトマス試験紙に似た小さな紙を洗面具入れの中から取り出し、流れに浸した。この小さなたんざく型の紙はペーパー紙といって水の浄化度をはかることができるので、日本から持ってきたのだ。ペーパー紙が全く反応しないのを確認すると、斎藤はその水を口に含んでうがいをし、歯を磨いて顔を洗った。周囲の木立ちから朝の冷気が降り、水は冷たく心地よかった。

家に戻ると、別棟の台所で、先に起き出していた二人がランニングシャツに半ズボン姿で炊事をしていた。二人はソロモン会の先発隊員、森本正隆さん（六十一歳）と上田力さん（六十歳）だった。森本さんは大阪、上田さんは京都在住だが、三十六年前にこの海域で戦い、逃げまどい、くたくたになって日本へ帰った経験の持ち主である。とくに上田さんはベララベラ島の撤退作戦に参加、海岸で土下座して連れ帰ってくれと叫んでいたこの島の旧日本兵たちを自分の目で見ている。五十一年の捜索にも参加、今回が二度目である。森本さんも五十五年十二月の捜索でこの島に二週間滞在、半年後また島へやってきた。

森本さんと上田さんの二人はガダルカナルの首都ホニアラからベララベラ島に入る途中、西ソロモン州政府のあるギゾ島のホテルで斎藤に出会い、合流したのである。今回の捜索先発隊派遣は政府との話し合いで外部には秘密にされていたのだが、二人は「救出という意味では目的は一緒なんだから、仲良くやりましょう。年寄り二人ですがよろしく」と快く言ってくれた。青春と戦争が重なった不運な時代を過ごした二人には、組織や政府の方針より旧日本兵救出の方が大事という気持がうかがえた。

「寝すごしてしまってすみません」

「ええですよ、若いんやから。ゆうべはおそかったようですね」

火をフウフウ吹いていた頭の白い森本さんが顔をあげて言った。四十歳をすぎた斎藤も、二人の軍隊経験者から見れば戦後育ちの若者である。

「長いことマキなんか使わしまへんやろ。日本はガスでも電気でもひねればおしまいですからな。それで苦労してますんや。それからこのバケツの水やけど、こっちの三つが天水、つまり飲料水ですわ。こっちの二つは川の水やから洗いもの用でっせ。間違えんようにしとくなはれや」

上田さんが親しみを込めた京都なまりでつけ加えた。

ニッパハウスのすぐ横に食堂がつくられていた。食堂といっても四方に柱を建てた三坪ほどの小屋にテーブルとベンチを置き、青いビニール・シートを屋根がわりにかけただけだが、キャメロンたちはこの建物を珍しがりテンプルハウスと名づけた。青い屋根が彼らには寺院(テンプル)のようにうつったらしい。

そのテンプルハウスでは、上田さんが罐詰や梅干、海苔(のり)などをテーブルの上に並べていたが、「わア、とりゃかなわんわ、えらいハエや」と悲鳴をあげた。

なるほど、あけた罐詰のまわりには何十匹というハエが飛びかっている。

島ではじめての朝食は、三人とも立ったままではじまった。ハエを追ったり、食器を持った手をハエから守るために動かしたりしながらの落ち着かない食事だった。

"You have many good drugs for fly in Japan, I think. Why didn't you take them with you?" (日本にはいい薬があるんだろう。持って来なかったのか)

ダンスをするような格好で食事をする三人を見て、キャメロンがゲラゲラ笑いながら言った。斎藤はまだ着かない荷物の中に入っているはずの殺虫剤のスプレーを思い出してハラが立った。一週間前に日本を発つとき、別送荷物としてかなりの運賃を払って送った生活道具は、ローカル航空を乗り継いでいるうちにどこにまぎれ込んだのか行方不明になってしまっており、その行方をつきとめるために、日本を一緒に発った佐藤はホニアラに釘づけとなり、斎藤だけが一足先にベラベラ入りしたのである。

食事が終ると、キャメロンがまじめな顔で忠告した。

「ハエには気をつけてほしい。食事ではあまり神経質になる必要はないが、ケガをした場合はすぐに傷口をふさがないと、二、三分でハエに食い荒らされる。例えばこの子がそうだ」

キャメロンはまわりにいた子どもの一人の肩を抱き寄せ、腕の傷口を示した。腕に五センチくらいの大きな穴があい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com